
ランメルモールのルチア

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ランメルモールのルチア

【Nコード】

N9512N

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

敵同士でありながら愛し合うルチアとエドガルド。だが二人の愛は無惨に引き裂かれそのうえない悲惨な結末となるのだった。ドニゼッティの悲劇を小説にしました。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

ランメルモールのルチア
第一幕 悲しい予兆

スコットランドの古い時代の話だ。この話を知る者は多い。この話を聞いて誰もが胸を痛める。この話はこのレーズンウツドの城からはじまった。

城の庭園の中は木々もあり広いかなり大きな城だ。下は緑の絨毯だがその草の色は冴えず何処か寒々としたものを感じさせる。

その絨毯の上に人々がいた。狩人の服を着ている。

「さあ、これからですが」

「ノルマンノ様」

「うむ」

彼等の中でもとりわけ背の高い痩せた顔の男に対して声をかけていた。黒い髪をしていて目は窪んでいて小さい。見れば彼も狩人の服を着ている。彼の狩人の服はブラウンである。

「我等はこれから何処に」

「何処に行けばいいでしょうか」

「海岸だ」

ノルマンノは彼等にそこだと告げた。

「いいな、それではだ」

「海岸ですか」

「あの海岸に」

「あそこにある塔のある場所に行き」

「あの場所に行き」

「そうして？」

「あの広大な廃墟に向かおう」

それを周りに告げるのだった。

「いいな、そして」

「そして？」

「あの汚らわしい秘密を隠しているヴェールと落とすのだ」

「そうするのですね」

「そうだ」

まさにそうするというのである。

「そうしてだ」

「そうして？」

「それから」

「我等を求めている名誉に伝えて忌まわしい真実を恐ろしい雲間の稲妻の様に見よう」

「そうするのですね」

「ここは」

「そうだ、そうしよう」

こう言っているのであった。逞しい顎鬚を生やした厳しい顔の大男がやって来た。赤いゆつたりとした服を着ている。マントも赤だ。見れば髭と髪はくすんだ金色で目は灰色だ。その彼がノルマンノ達のところへ厳しい顔でやって来たのである。随分と不機嫌な様子だ。ノルマンノがその彼に声をかけてきた。

「エンリーコ様」

「何だ？」

「随分と不機嫌な御様子ですが」

「どう彼に問うのだった。」

「どうされたのですか？」

「理由はわかっている筈だ」

エンリーコはその不機嫌な声で彼に返した。

「わしの運命はだ」

「運命は」

「残念なことに色褪せようとしている」

「こう言うのである。」

「そしてだ、あの男はだ」

「エドガルドめですか」

「そうだ、あの我が一族にとって代々の宿敵であったあの家の最後の生き残り」

エンリーコの声が実に忌々しげなものになった。

「あの男が廃墟から我々を嘲笑っているだろう」

「我が家をですか」

「左様」

まさにそうだというのである。

「しかしだ」

「しかし？」

「その屈辱を晴らすことはできるのだ」

「ルチア様ですね」

「そうだ、あの娘をだ」

顔を見上げて語るのだった。

「あの娘を使う。だが」

「ルチア様はまだ納得されません」

「どうするべきか」

「落ち着かれて下さい」

ここで黒い法衣を着た男が出て来た。金髪碧眼で細長く端整で知的な顔をしている。彼が出て来てエンリーコに対して言うのであった。

第一幕その二

「お待ち下さい」

「ライモンドか」

「はい、ルチア様はです」

彼、ライモンドもまたルチアの話をした。

「先頃亡くなられた」

「母上のか」

「そうです、母上のことを泣いておられるのです
「そうだとするのである。」

「お気の毒な乙女がどうして花嫁の褥に入ることができましようか」

「ではどうせよというのだ？」

「お待ち下さい」

こうエンリーコに言うのだった。

「今は」

「今はか」

「はい、ルチア様はお優しい方です」

「優し過ぎる」

「だからです。ここはです」

「待てというのだな」

ライモンドの言葉を受けて言うのだった。

「つまりは」

「御願います」

「それはわかった」

エンリーコの彼のその言葉は受けた。

「しかしだ」

「しかし？」

「今はそれでもだ」

「こう言うのである。」

「それどころではない。我が家は」

「エンリーコ様」

しかしここでノルマンノがエンリーコの耳元で囁いた。

「ルチア様はです」

「どうしたのだ？」

「愛に燃えているのです」

こう囁くのだった。

「どうやら」

「まさか、そんなことが」

「待つのだ、ノルマンノ」

ライモンドはすぐに彼を止めに入った。

「ここはだ」

「しかしライモンド殿」

それでもノルマンノも言い分があった。

「今我が家は」

「しかしだ。ルチア様は今」

「そういう訳にもいきません。今は」

彼は家を立てていた。明らかにその立場に立っていた。

そうしてだった。彼は言うのであった。

「御母上が葬られているその庭園のです」

「あの場所というのか」

「そうです」

ノルマンノはライモンドに対して話していく。

「あの寂しい路をルチア様が歩いておられました」

「あの路を御一人でか」

「私が見たその限りはです」

「そつだというのだ。」

「そこを歩いておられますと怒り狂った雄牛が出て来てです」

「そしてどうなったのだ」

「あの方めがけて突き進んで来ました」

ノルマンノはこう語っていく。

「しかし空をつんざく銃声が一発轟き渡り」

「銃声が」

「そうして雄牛は倒れました」

そう言ったというのだ。

「それを見ました」

「ではそれは誰だ？」

「その時の男の顔は夜の闇でよくは見えませんでした」

「そうか」

ここでエンリーコがノルマンノに対して問うた。

「それは残念なことだ」

「ですがルチア様はです」

「それからも会っているというのだな」

「そうです」

まさにその通りだとエンリーコに話していく。

第一幕その三

「毎日夜明けにです」

「それは何処でだ」

「あの並木路で」

その場所も語られた。

「会っています」

「許せん」

それを聞いたエンリーコの顔はさらに不機嫌になっていく。

「わしの目を盗んでその様なことをしていたのか」

「はい、その通りです」

「それではだ」

ここでエンリーコはノルマンノに対してさらに問うのであった。

「その男は誰だ」

「それはわかりません」

「わからないというのですか」

「はい、そうです。ですが」

「ですが？」

「まさかと思うのですが」

不吉な顔をしての言葉になっていた。

「あの者は」

「誰なのですか？」

「まさかとは思いますが」

さらに語っていくが顔に浮き出ている不吉さはさらに高まっていた。
た。

「あの男か」

「どつちやら」

「何ということだ」

それを聞いたエンリーコの顔がさらに憤怒で高まっていく。

「残酷で忌まわしい感情だ。この疑念に身体が凍り震え」

「エンリーコ様、どうかここは」

ライモンドが何とか彼に対して言う。

「落ち着き下さい。冷静に」

「穏やかにです」

「穏やかにだと！？この髪の毛を逆立たせるこの心は最早静められ
はせん」

こう言って怒りをさらに増し言葉も出していく。

「わしの妹が我が家にこの様な恥辱をもたらそうとは。これ程罪深い恋を犯し」

「まだわかりませぬ」

「わしを裏切る前にだ」

最早彼はライモンドの言葉を聞けなくなっていた。

「わしが雷に打たれてもこれだけの恐ろしい運命はあるまい」

「まだはつきりとしませんが」

ノルマンもこう断りはした。

「ですが。このままでは」

「エドガルドなどと共にいられるものか」

苦々しい顔での言葉だった。

「何があってもだ」

「どうかここは落ち着かれて」

ライモンドは彼を何とか落ち着かせようとする。しかしそれはできなくなるうとしていた。

「どうか」

「ノルマンノ様」

「ここにおられましたか」

ここで何人かの狩人姿の男達があらたに庭に入って来た。

「調べてきました」

「その通りでした」

「そうか、やはりか」

ノルマンノは彼等のその言葉を聞いて頷いたのだった。

そうしてそのうえで。エンリーコに顔を向けてまた言った。

「この通りです」

「ではやはり」

「はい、そうです」

まさにそうだと話すノルマンノだった。

「あの男です」

「話せ」

エンリーコはその密偵達に対して告げた。

「詳しいことをだ」

「はい、それでは」

「お話ししよう」

こうして彼等は話をはじめた。その話は。

「あの塔の崩れかかった入り口に入るとです」

「そこにしじまの中を蒼ざめた一人の男が通り過ぎました」

「その男だというのだな」

「そうです」

まさにその通りだという。

第一幕その四

「男は足の早い馬に乗り私達の前から消え去りました」

「男の名は鷹匠から聞きました」

「そしてその男の名は」

「エドガルドです」

「またしてもこの名前が出て来た。」

「あの男でした」

「間違いなく」

「許せぬ」

それを聞いていよいよ言うエンリーコだった。

「あの男、どうしてくれようか」

「どうかここはです」

ライモンドは必死に彼に告げてきた。

「落ち着き下さい」

「ならん！」

しかしそれはもう無理だった。

「それはだ。最早だ」

「ですがそれは」

「ルチアのことを思い温かい心を出そうとしてもだ」

「ではどうされるのですか」

「復讐だ」

最早彼にはそれしかなかった。

「復讐を遂げる。あの男にだ」

「ではやはり」

「そうだ。わしの怒りは最早何よりも増して強く唸っている」
それが今の彼だった。

「この怒りの炎であの男を焼き尽くそうぞ」

「ではいよいよ」

「エドガルドを」

「そうだ」

狩人達に対して話した。

「ここはだ。何としてもです」

「何としても」

「ここは」

「そうだ。何としてもだ」

その決意は明らかだった。

「何としてもあの男を倒す。このわしの手で」

「ではエンリーコ様、ここは」

「我等も！」

狩人の格好をしている兵士達も主の言葉に応える。恐ろしい炎が城の中に燃え盛っていた。

そしてその頃。寂しい荒野に二人いた。一本の細い木があるその下にふくよかな顔の小柄な美女がいた。豊かな金髪に青い目を持っておりその波立つ髪の毛の奥に儂げな顔を見せている。服は白く清らかなものだ。その彼女が一人のブラウンの髪に緑の目を持つ緑の美女に声をかけていた。この美女は彫は浅いがはつきりとした顔立ちをしていて口が大きい。その服は緑であった。

白い服の美女がだ。ここで緑の美女に対して問うた。

「アリーサ」

「はい、ルチア様」

二人は木を挟んで話をしていた。

「もうすぐなのね」

「ですが」

アリーサはそのルチアに対して不安な顔で言うのだった。

「あまりにも危険です」

「危険だというのね」

「そうです」

それはあまりにもどうかというのである。

「エンリーコ様が気付かれた楊です」

「兄上が」

「ですからここは」

「こう言うのだった。」

「戻られるべきです」

「けれどその前に」

それを聞いてまた言うルチアだった。それでもといった口調だ。

「エドガルドに危機を伝えなくては」

「あの方にですか」

「そうです」

そうすると行って聞かないのだった。

「おそらくここにもお兄様が来られるのですね」

「それは間違いなく」

「ではここは」

「残られるのですね」

「そうです、危機をお伝えしなければ」

こう言いはした。しかしここで木のほとりにあるものを見たのだ。つた。

第一幕その五

「あれは」

「どうされました？」

「あの泉は」

暗い世界の中に一つあるその黒く寂しい泉を見て言うのだった。

「あの泉を見ていると思ひ出すのです」

「あの泉がどうかされたのですか？」

「レーブンウツド家のある男がです」

他ならぬルチアの家と宿敵の家のことである。

「嫉妬の怒りに燃えてそうして愛していた女を刺し殺しました」

「そのお話をされるのですか」

「そうです、それを思い出して」

「そうだといいのだ。」

「その不幸な女は今」

「水の中に」

「その水の中に眠っている不幸な女を見たのです」

「まだ泉を見ていた。まだであつた。」

「それが」

「暗い夜更けの中で辺りは静まり返り」

「その言葉が続けられる。」

「陰気な月の青白い光が水面を照らしていました」

「言葉は不吉な響きに満ちていた。何よりもだ。」

「低い悲しげな呻きが風の中に聞こえてきてこの黒い泉の上に」

「それは気のせいです」

「けれど私は確かに見ました」

「それでもルチアは言うのだった。」

「何かを話す人の様に唇が動くのが見えて生気のない顔で私を招いていて」

「お嬢様、それは」
「一瞬じつと立っていたかと思うと突然消えてしまいました」
最後に言う言葉は。
「どうしてあんなに澄んで黒かった水が赤く見えるのかしら」
「そんなことを仰らないで下さい」
アリーサはそんなルチアを心から気遣って声をかけた。
「どうか」
「それは何故なのですか？」
「悲しい前兆を感じます」
「前兆を」
「そうです」
「だからだというのだ。」
「ですからそれはです」
「それでは私は」
「どうか諦めて下さい」
そしてこう主に告げたのだった。
「この恋は」
「どうしてそんなことを言うのです？」
「お嬢様のことが本当に心配だからです」
アリーサも真剣だった。
「ですから。それはどうか」
「いえ、違います」
しかしここでルチアは言うのだった。
「あの方は不吉ではありません」
「では何だと仰るのですか？」
「光です」
その不吉とは対極にあるものだというのだ。
「光です。不吉などではありません」
「違つと仰るのですね」
「はい、まさに私の悩みの慰めです」

そこまで言うのだった。

「あの方がこの上なく燃える情熱で私の心に触れた時に」

「その時にですか」

「そうです。心からの言葉として」

「こう言うのである。」

「私に永遠の誠を誓われました」

「そうだと仰るのですね」

「そうです。私は悲しみを忘れ涙は喜びに変わり」

その言葉を続けていく。

「あの方の御傍にいと私は天国が開く様に思えます」

「しかしです」

「まだ言うのですか？」

「お嬢様があの恋に身を入れられると」

「あの方はあの家の御出身だからですか？」

「そうです」

それこそが理由だというのだ。

第一幕その六

「苦い涙の日々が待っているのですよ」

「いえ、それは」

「あの方が来られた様ですが」

「そうね」

二人共その気配を察したのである。それで言い合う。

「どうやら」

「では私はこれで」

アリーサはこう告げてその場を去ろうとする。

「誰か来ないか見ておきますので」

「いつも有り難う」

「お嬢様の為です」

まさにその通りだというのだ。

「ですからこれで」

「ええ、御願いね」

こうしてアリーサは姿を消した。するとそれと入れ替わりに青い服とマントを着た黒く豊かな髪を後ろに撫で付けた男がやって来た。眉ははつきりとした濃さで細くしっかりとしている。目は奇麗で黒く見事な二重である。鼻の形はしっかりとしていて口元も端整である。その彼がやって来たのだ。

「ルチア、まずは済まない」

「どうしたのですか？エドガルド様」

「こんな時間に会いたいといったことは」

「まずはそのことを彼女に謝罪したのである。」

「それは申し訳ない」

「そのことですか」

「実は訳があつて」

「それはどうしてなのですか？」

「明日の夜明けには」

今度は時間を言ってきたのだった。

「空が明るくならないうちにこの祖国から離れなければならないのだ」

「何故ですか？」

「私はフランスに向かう」

ルチアのその顔をじっと見詰めながら話した。

「あの国と我が国の交渉をする役目を仰せつかったのだ」

「陛下からですか」

「そうだ、陛下からだ」

まさしくその通りだという。

「そう仰せつかったのだ」

「そうだったのですか。それで」

「それでだ。だからこそ」

「では私は」

「君と別れる前に」

真剣な面持ちでルチアに告げる。

「彼と会えるといいのだが」

「お兄様に」

「代々に渡る怨敵の間柄を打ち消し」

彼はそのことを心から望んでいた。

「そうしてその和解の証として」

「証として？」

「君の手を求めたい」

こうルチアに対して話したのだった。

「是非共」

「いえ、それは」

しかしルチアはエドガルドのその言葉に首を横に振った。

「なりませんわ」

「駄目だというのかい？」

「そうです、私達のことは」
ルチアもまたまるで戦場にいるかの如き強張った顔で話す。
「誰にも秘密でなければ」
「ならないというのか」
「そうなのか」
「はい、ですから」
「では私の一族に対する罪深い迫害者はだ」
それが誰かはもう言うまでもなかった。
「まだ満足していないのだな」
「といいますと」
「彼は私の父を殺し先祖伝来の遺産を奪い」
怨恨は深かった。そこまで。
「それでも満足しないのか。そのうえで何を望んでいるのだ？」
「それは」
「私の完全な没落か死か」
「死!？」

今の言葉を受けて思わず声をあげてしまったルチアだった。

第一幕その七

「まさかそれは」

「彼は私を憎んでいる」

それは実によくわかることだった。

「だからこそだ」

「ですがそれは」

「私もまた同じだ」

その代々に渡る怨恨が彼にもあつた。

「この胸の中にある。だからこそ」

「どうされたのですか？」

「聞いて欲しいのだ」

切実な顔でルチアに言ってきた。

「私のあの裏切られた父の」

「お兄様が殺したあの方の」

「そう、父の墓の上で誓つたのだ」

彼は言つた。

「父が殺されたその時。怒りを込めて君の一族に対する永遠の誓いをだす」

「そうだったのですか」

「しかし君に会って私の心に別の感情が生まれた」

「それでは」

「怒りは収まつたが誓いはまだ残っている」

「まさか」

「そう、そのまさかだ」

こつルチアに返してさらに言つた。

「私は誓いを果たすことができるのだ、今も」

「どうかそれは」

ルチアはすぐにその彼を止めた。

「お忘れ下さい」
「忘れるというのか」
「せめて御気を鎮めて下さい」
「こう言って何とか彼を宥める。」
「どうか。私もまた」
「君も？」
「苦しいのです」
「君もまたというのか」
「そうです」
また切実な顔になっていた。
「その苦しみはまだ足りないかと仰るのでしょうか」
「それは」
「どうかです」
そしてさらに言うルチアだった。
「これ以上の苦しみで私を殺さないで下さい」
「ルチア……」
「怒りや憎しみはお忘れになって」
「それが彼女の願いであった。」
「どうか愛だけを」
「愛……」
「そうです、愛をです」
「それだけだというのだ。」
「貴方様のその胸に宿されて下さい」
「それが君の望みなのだな」
「そうです」
これ以上はないまでにはっきりと答えてみせた。
「どうか私に」
「では誓おう」
エドガルドも彼女のその言葉を受けて述べた。
「それではだ」

「それでは？」

「私達はここで永遠の絆を結ぶ
こう彼女に告げたのである。

「天に対して誓おう」

「神に対して」

「そう、ここに神がおられる」

「このことをルチアに対して言うのである。

「愛する心は聖堂であり祭壇でもあるから」

「ではここで」

「これを」

指輪を出してきた。そしてそれをルチアの指にはめる。

そして自分の指にも。そのうえでまた言うのであった。

「これを破ったならばその時は」

「はい、大地に倒れ死にます」

「そうだ、そうなってしまうのだ」

まさにそうだというのである。スコットランドでは誓いを破った
ならば天罰が下り大地に倒れそうして死ぬと言われていたのである。
彼等はそれを知ってあえて言うのであった。

「それを破ったならば」

「わかっています」

「私達はこれで永遠の絆を結んだ」

エドガルドは今それを己の中に見ていた。

「これを分かっもの、それは」

「それは」

「死だけだ」

それだけだと。今言った。

「それ以外の何者でもない」

「では私達は例え離れていても」

「永遠だ。では」

「行かれるのですか？もう」

「時が迫っている」

だからだというのである。

「私はこれで」

「では私は」

「どうするというのだ？」

「貴方がフランスに行かれるなら」

そうならばというのだった。

「私はこの心をフランスに」

「送ってくれるのか」

「私の心はいつも貴方と共にあります」

だからだというのである。

「ですから」

「わかった。それではだ」

「はい」

「私はいつも君のことを感じている」

今にもルチアを抱き締めようとしていた。しかし今はそれをしな
かった。

「フランスにあつてもだ」

「御便りもどうか」

ルチアはこのことも彼に告げた。

「そうして私の儂いこの運命にも希望を」

「わかっている。それもまた」

「御願います」

「私のこの燃える溜息が」

ルチアを見詰めての言葉である。

「そよ風に乗って君に届く」

「私に。それでは」

ルチアもそれに応えて言つたのだった。

「貴方は眩く海に私の嘆きが木霊するのを聞かれるでしょう」

「それをだというのか」

「そうです」

まさにその通りだという。

「それを知って誓って下さい」

「わかっている。では今誓おう」

「はい、その誓いを御便りに入れて下されば」

「ではまた」

「御会いしましょう」

「神が結びつけてくれた幸せに誓って」

こう言い合い今は別れた。二人は永遠の絆で結ばれた。しかしその二人の上にある空は暗鬱なものであった。そこには雷が無数の竜の如くうねり轟いていた。

第二幕その一

第二幕 恐ろしい誓い

エンリーコの部屋は質素なものだった。厚い壁に覆われ下には絨毯さえない。堅く背の高いベッドがあり窓からは嵐が見える。そして粗末なテーブルや椅子、それに本棚に何冊かの書があるだけだ。彼は今その部屋にいた。そうしてノルマンノの話聞いていた。

「ルチア様は間も無く来られます」

「間も無くだな」

「はい、間も無くです」

こうエンリーコに告げてきていた。

「ですから御安心下さい」

「ならいいのだがな」

こうは言ってもその顔は晴れない。

「それでな」

「何かおありですか？」

「今ここに我が家の一族達もいる」

彼等のことを言葉に出したのである。

「そしてアルトゥーロ殿もだ」

「ここに来られます」

「しかしだ」

だがここで彼は不安に満ちた顔で言ったのだった。

「あれが最後まで反対したとしたら」

「それは御安心下さい」

しかしノルマンノはここで主に対して述べた。

「そのことについては」

「大丈夫だというのが」

「あのエドガルドのことですね」

「そうだ、それだ」

まさしくあの男のことであつた。エンリーコが気にかけているのはだ。

「あの男がどうするかだ」

「まずあの男は今フランスにいます」

彼は既にそのことを知っていた。

「それにです」

「それに。何だ？」

「あの男の手紙がルチア様に送られたのですか」

「それはまことか！？」

それを聞いて驚きの声をあげるエンリーコだった。

「まさかとは思っていたが」

「しかしそれは我々に手に落ちました」

「そうだったのか」

それを聞いてまずは安心した彼だった。

「ならいいのだがな」

「その手紙を改竄しましたので。筆跡を真似て」

「どういった風にだ？」

「あの男は他の女に心を奪われました」

いささか邪悪な笑みと共に述べたのだった。

「こう書いた手紙にしておきました」

「おお、それはいい」

エンリーコはそれを聞いて顔を少し明るくさせた。

「それではだ」

「はい、ルチア様もその御心を取り戻されるでしょう」

「そつだな、間違いなく」

「ではその手紙をだ」

「受け取られますか？」

「無論だ」

他に選択肢はないといった言葉だった。

「それをルチアに見せてだ」

「はい、そうされるのが宜しいかと」

「そしてノルマンノ」

ここであえて彼の名前を呼んで告げた。

「そなたはだ」

「どうされよと」

「エジンバラへの路に向かつてくれ」

他ならぬスコットランドの首都である。そこへの道にといつのである。

「いいな、そこに向かつてくれ」

「いざという時の用心の為にですな」

「そうだ。そして手紙を受けてだ」

「ルチア様にお見せした後で」

「婚礼だ」

そこまで全て描いたのであった。

「いいな、それでだ」

「わかりました。それでは」

「これでいい」

エンリーコも会心の笑みになっていた。

第二幕その二

「これで我が家は救われる」

「はい、間違いなく」

こうしてノルマンノは退室しエンリーコのところはその改竄された手紙が届けられてた。暫くしてルチアが彼の部屋に呼ばれた。

彼女は強張った顔で部屋に入って来て。そのうえで兄に一礼した。

「お兄様、一体何の御用でしょうか」

「わかつているな」

こう妹に対して告げたのだった。

「御前の為に結婚の松明が輝くのだ」

「それは」

「この日このよき日の為に笑うのだ」

妹にまた言った。

「そんな御前を見たいのだが」

「ですが私は」

「何だというのだ？」

「笑えません」

俯いての言葉だった。

「どうしても」

「忘れていないというのか？」

「それは」

「過ぎたことは言わん」

ここではあえて優しい顔を見せた。

「それはだ」

「ではそのまま」

「しかしだ。兄としてだ」

その兄の顔も見せた。半分は本当に見せている。

「それを見過ごす訳にはいかんのだ」

「ではやはり」

「そうだ。分別のない恋の炎を消し」

「そうして」

「高貴な花婿をだ」

「それはできません」

俯いたままだがはっきりと答えたのだった。

「決して」

「何故だというのだ!？」

「私は誓いました」

怒りを見せはじめた兄への言葉である。

「ですから」

「それはできないというのか」

「そう言うのだな」

「はい」

蒼ざめた今にも死にそうな顔での言葉である。

「ですから私はそれは」

「そう言うのならだ」

ここで、であった。エンリーコはその切り札を出したのであった。テーブルの上にあった手紙を出した。それを彼女に差し出したのである。

「読んでみるといい」

「これは一体」

「手紙だ」

まさにそれだという。

「この手紙を読めばよくわかる」

「この手紙を」

「そうだ、あの男がどれだけ不実な男がかだ」

「あの方はそんな」

「読めばわかる」

こう言って切り札を取らせたのだった。

そうしてルチアはまるで誘われるかの様にその手紙を読みはじめた。読んでいくにつれてその顔が強張りさらに蒼くなっていった。

震える声で。彼女は言った。

「まさか、そんな……」

「落ち着くのだ」

後ろからそつと妹の両肩を抱いて告げた。

「今はだ」

「そんな筈がありません」

まだ信じようとしなない彼女だった。

「こんなことが」

「信じないというのだな」

「嘘です」

手紙の中を読んでもであった。それでも言うのだった。

「信じています」

「信じているといってもだ」

「他の方を愛されるなぞ」

「しかし確かに書いてある」

偽りの手紙であるということとは勿論隠していた。そのうえでの言葉だ。

「そこにだ」

「ですが」

「信じるのだ」

あえて妹に言うのだった。

「わしの言葉を。手紙を」

「それでは……」

「御前は不実な男を愛し」

「じつ言っていく。」

第二幕その三

「そしてそれに相応しい報いを受けたのだ」

「何ということ……」

「しかしだ」

ここで遠くから賑やかな声が聞こえてきた。エンリーコはそれに気付いたうえで妹に対してさらに告げたのである。その告げた言葉は。

「聞こえるか」

「えっ……」

「この声だ」

その遠くからの声を妹にも告げた。

「この声だ。聞こえるな」

「まさか。この声は」

「そうだ、御前の花婿がここに着いたのだ」

このことを彼女に言うのだった。

「今ここにだ」

「そんな……」

「全ては整った」

彼は妹をさらに追い詰めた。

「さあ、幸せに向かおう」

「全ては終わったのね」

ルチアはこう言うしかなかった。

「もうこれで」

「今我が家はだ」

今度は自分達の一族のことを話すのだった。

「先王様が崩御されメアリー様が即位されたな」

「はい……」

「そして我等の党派は敗れた」

スコットランドでの貴族同士の政争である。この時代の欧州の貴族達の常であった。何かといえば党争を繰り広げていたのである。彼の一族はそれに敗れたのだ。これもまたよくあることだった。しかしそれこそが彼を今窮地に陥れているのであった。だから今余計にルチアに言うのである。

「それを救うことができるのはアルトウーロ殿だけなのだ」

「その方だけが」

「では私は」

「一族の為だ」

政略結婚というわけだ。貴族社会の常ではある。

「わかったな」

「ですが私は」

まだ言うルチアだった。

「あの方に永遠の誓いを」

「では一族はどうなるのだ」

このことを前に出した。

「御前が拒むとなればだ」

「ですが。それでも」

「そうなればだ」

彼はここでさらに言うのであった。見事なまでに妹を次第に追い詰めていた。

「一族も終わる」

「一族も」

「無論わしもだ。そしてわしも一族の者も全て御前の前に亡霊となつて現われることになるのだぞ。それでもいいというのか？」

「神よ」

ルチアは涙を流しながら述べた。

「どうか私にお慈悲を」

こう言うのである。俯いたままであったが。

「私の願いが地上でも天上でも適えられないのなら」

絶望しきつての言葉だった。

「この望みのない命を奪い取って下さい。もう希望はありません」
「ではわしはだ」

エンリーコはここで部屋を後にするのだった。

「色々取り仕切らなければならん。それではな」

こう言つて消えるのだった。後に残つたのはルチアだけであつた。そのルチアのところは今度はライモンドが来た。彼は彼女を気遣う顔で優しく言つてきたのであつた。

「ルチア様」

「司祭様ですか」

「はい。フランススへのお手紙ですが」

「私が書いたあれは」

「どうもおかしいのです」

ここで怪訝な顔になるのであつた。

「届いていない様なのです」

「届いていないとは」

「どうやらエンリーコ様が手を回されて」

「それで届いていないのですね」

「おそらくは」

それがノルマンノの仕事であることまでは彼等も知らなかつた。

しかし届いていないという現実だけははっきりとわかつたのである。

第二幕その四

「試しに私の手紙の中に入れて確かな手を通じて送ったのですが」
「どうなったのですか？」

「音沙汰がありません」

首を横に振つての言葉であつた。

「何一つとしてです」

「では私はどうすれば」

「残念ですが」

こつ前置きしたうえで言葉であつた。

「運命に従われるしかありません」

「そんな……」

「ここはどうか」

こつ言うしかなかった。彼もだ。

「それをお受け下さい」

「では私の誓いは」

「それは残念ですが」

沈痛な顔であつた。しかし告げるしかなかった。彼もだ。

「もう。それも」

「それでも私の心は」

「それに勝たれるしかないのです」

告げたくはなかった。しかし今は告げるしかなかったのである。

「最早」

「何という悲しみ、そして不幸」

「しかしです」

それでも言うダイヤモンドだった。

「これは最早です」

「私に残された道はもう」

「はい、お母上の為にも」

「お母様の為にも」

「そうです」

ライモンドは先日亡くなった彼女の母のことも話に出した。これは話術の一つであった。

「あのお母上の為にも。そして一族の為にも」

「私を愛して育ててくれたあの方々の為にもですか」

「どうかです」

その言葉は切実なものになっていた。

「ここはお受け下さい」

「お母様の為にも」

「是非です」

それは何としてもというのだ。

「御願いです、ここは」

「では私は」

「貴女が一族の為にあの愛を諦めて下されば」

「私一人で多くの人が幸せになれる」

「それにアルトゥーロ様もです」

ルチアが結婚する予定のその彼のことだ。

「無体な方ではありません。きっと幸せになります」

「幸せ……私の幸せは」

「どうかしつかりと」

こう言つて何とか彼女を部屋から出すのであった。城の大広間は幾多のキャンドルで明るく照らされ眩いまでであった。きらびやかに金や銀で飾られた広間には多くの着飾った紳士と淑女がいる。エンリーコはその中で黒髪の穏やかな目をしている若い男と互いの両手を使って握手をしていた。若者の服とマントは黄色でそれが広間の中でとりわけ映えていた。

「ようこそアルトゥーロ様」

「よくぞおいで下されました」

エンリーコの一族の者達と兵士達が彼を讃えて言う。アルトゥー

口は一旦エンリーコから手を離し満足している顔でその言葉を受けている。

「貴方がここに来られたことで」

「一つの愛が生まれることでしょう」

「有り難うございます」

アルトウーロはその彼等に笑顔で応えていた。

「私は貴方達の為にここに来ました」

「これで私達は貴方の友人となり」

「永遠の絆がここにできます」

「その通りです。そして」

彼はエンリーコに対しても言った。

「エンリーコ殿」

「はい」

「私は貴方の許に友人として、兄弟として」

「来られたのですね」

「その通りです」

満面の笑みでの言葉であった。

第二幕その五

「以後も宜しくお願いします」

「是非」

「そしてルチア殿は」

彼は大広間の中を見回しながらエンリーコに問うた。

「まだでしょうか」

「もうすぐです。ただ」

「ただ？」

「あれは気の優しい娘でして」

ここでこのことも話した。

「母の死をまだ悲しんでいるのです」

「そうらしいですね。そして」

アルトゥーロの顔が微かに曇った。

「彼女に言い寄る男がいるとは」

「その男については貴方も御存知の筈です」

「エドガルドですか」

「そうです」

二人の顔が話しているうちに曇った。

「あの男がいるのです」

「そうですか」

それを聞いてアルトゥーロの顔がさらに暗いものになった。

「あの男が。やはり」

「そのうちこの手で決着をつけます」

エンリーコの目に剣呑な光が宿った。

「ですから御安心下さい」

「はい、それでは」

「エンリーコ様、来られました」

「ルチア様です」

ここでノルマンノと兵士が一人来て彼に告げてきた。

「うむ、わかった」

「いよいよですね」

エンリーコはまだ険しい顔だったがアルトゥーロは喜んでいた。

二人の表情にはそこまで見事に違いが出てしまっていた。だが周りはそれに気付かない。

「花嫁が来たぞ！」

「ようこそルチア！」

「何と美しい！」

遂にルチアが来た。左右にそれぞれライモンドとアリーサがいる。二人はルチアを支える様にして彼女の左右にいたのであった。

エンリーコは彼女が自分の前に来ると。すぐにアルトゥーロを右手で指し示して話すのだった。

「こちらがだ」

「私の」

「そうだ。夫となる人だ」

アルトゥーロは無言で微笑みルチアに会釈した。

「よいな」

「………はい」

ルチアは蒼ざめた顔で兄の言葉に対して頷いた。

「わかりました」

「何という美しさだ」

アルトゥーロはただルチアの顔と容姿だけを見て述べた。

「これ程までとは」

「それではです」

エンリーコは話を強引に進めにかかった。結婚の契約書があるテーブルを持って来させそのうえでさらに二人に対して言うのであった。

「それでは誓いを」

「はい」

アルトウーロはにこやかに進む。ルチアは絶望した顔で何とか進んでいた。

アルトウーロのサインはすぐに終わった。しかしルチアは。

羽根のペンを手にしても中々進まない。手が震え動かないのだ。

「ルチア様、勇気を」

「けれど」

ライモンドに促されても手が動かないのだった。顔はさらに蒼くなっていく。

「手が」

「早くするのだ」

横から兄が睨みながら言ってきた。

「いいな」

「………はい」

何とかサインをした。そして一人呟くのだった。

「私の幸せはこれで」

「全ては終わった」

エンリーコはその横で安堵した顔になっていた。

「まずは何よりだ」

「何という災厄………」

ルチアがまた力なく呟いたその時だった。不意に外から物々しい音が聞こえてきた。

第二幕その六

「!? あれは」

「何だ!？」

「何の騒ぎなの?」

皆その音に不意に声をあげて周りを見回す。するとここで扉が開け放たれる音がしてそうしてであった。外套に身を包んだ一団が広間に乱入してきたのである。

「誰だ、この祝福の場に!」

「何の用で来た!」

「私だ!」

先頭の男がその外套を脱いだ。そこにいたのは。

「エドガルド!」

「ああ!」

エンリーコとルチアが彼の姿を見て同時に声をあげた。ルチアの顔は今にも割れんばかりであった。それは鏡が槌で割られたかのごとくであった。

「どうして……………」

「ルチア様……………」

アリーサが倒れようとする彼女を慌てて後ろから支えた。それのことなきを得た。

だがエンリーコが彼の前に出て。今にも剣を抜かんばかりの顔で言うのだった。

「貴様か」

「そうだ、私だ」

「何故ここに来た」

「こうエドガルドに問うのだった。」

「ルチアに用があるのか」

「だとすればどうする?」

「あの娘は貴様のものではない」
「こうは言った。しかしであった。」
「だが。何だというのだ、心の中に悔恨の念が起る」
「こう一人呟くのだった。」
「わしの中に。何故だ」
「怒りで燃え上がりそうだ」
「そしてエドガルドも呟く。」
「しかし彼女を。不実なあの娘を見ていると」
「ルチアを見ての言葉である。」
「愛を感じずにはいられな。私はまだ彼女を強く愛している」
「死んでしまいそう」
「ルチアも言う。」
「驚きのあまり。何もかもが終わって」
「こう呟くのだった。」
「そして死んでしまいそう。涙はもう涸れて出て来なくなったとい
うのに。神にさえ見放されたしまった私はもう」
「何と恐ろしいことだ」
「ライモンドも顔を蒼白にさせていた。」
「最早言葉もない」
「これから恐ろしいことが起るのね」
「どうすればいいのか」
「アリーサとノルマンノも同じだった。顔は蒼白である。」
「このままだと」
「取り返しのつかないことが」
「彼女の顔は」
「そしてアルトゥーロもまた。」
「太陽の光が覆われ萎れた薔薇の様になって」
「生と死の中にあるような」
「何というお顔」
「恐ろしい……」

ライモンドもアリーサもノルマンノも言葉を失っていた。だがエンリーコとアルトウーロはかるうじて気を取り戻して剣を抜いてエドガルドに言うのだった。

「立ち去るのだ、悪党め！」

「そうだ、さもなければだ！」

二人は並んでエドガルドに叫ぶ。それぞれの赤と黄色がエドガルドの青に対する。

「ここで死ぬことになるぞ！」

「そうだ！」

「いいだろう」

エドガルドも剣を抜いた。そのうえで言う。

「私は死ぬだろう、だがそれと共に多くの血も流れるぞ」

「言うのか」

「ならば」

三人はそれぞれ斬り合おうとする。だがここでライモンドが出て来た。三人の間に彼の黒いその法衣が来て間に入ったのである。

「お待ち下さい」

「ライモンドか」

「はい、ここはどうか剣を収めて下さい」

こうエンリーコに対して言うのだった。

第二幕その七

「どうかここは」

「ならん、この男だけはだ」

「私もだ」

そしてエドガルドも言うのだった。

「ここは何としてもだ」

「斬る、誰もを」

「神が祝福される場です」

彼はその彼等に対して神の名を出した。

「神は人を殺すことを好まれません。剣で人を殺める者もまた剣によつて滅びます」

「くつ、わかつた」

「それでは」

「今は収めよう」

三人は何とか剣を収めた。だがエンリーコは怒りを抑えきれない顔でエドガルドに問うた。

「言え！」

「何をだ」

「何故ここに来た」

それを問うのであった。

「誰が貴様をここに誘つたのだ」

「運命だ」

エドガルドは昂然として言葉を返した。

「私はそれによつて来たのだ」

「だからだというのだな」

「そうだ、ルチアはだ」

彼は今度はきつとした顔でルチアを見据えた。ルチアは彼のその強い怒りに満ちた目に顔をさらに白くさせてしまった。

「私に永遠の愛を誓った」

「それはもうお忘れ下さい」

こう返すライモンドだった。

「どうかそれは」

「それは何故だ」

「ルチア様はもう他の方のものです」

「何っ!？」

「これを御覧になって下さい」

ここでエドガルドに結婚契約書を見せた。そこには確かにルチアのサインがあった。

彼はそれを読んだ後でまたルチアを見据えた。そのうえで言うのであった。

「震えている」

「エドガルド……」

「そして取り乱している」

彼はそのことをすぐに見抜いた。

「これは貴女の字なのか」

契約書を手に彼女に問う。

「それで間違いないのか」

「……はい」

雪の様に白くなった顔での言葉だ。

「その通りです」

「わかった」

それを聞いてまず頷くエドガルドだった。そうして己の指輪を外しそうしてそれを床に叩きつけ足で踏み躪った。そのうえで忌々しげに叫ぶのであった。

「貴女は裏切った」

怒りに満ちた目でルチアを見据えて言ったのだった。彼女はもう何も言えなくなっていた。

「神も我々の愛も」

そしてさらに言っ。

「呪われるのだ、何もかも。私は最早誰も愛さないし全てを憎む」
「何ということを」

「指輪を踏み躪るとは」

「言った筈だ。私は全てを憎むと」

実際にその目には最早憎悪と憤怒しかなかった。そして悲しみと。
「ならば私は」

再び剣を抜いた。それを見てまたエンリーコとアルトゥーロも剣を抜いた。

双方の後ろにそれぞれの兵士達がつく。彼等も剣を抜いていた。

「出て行くのだ！」

「最早許してはおけぬ！」

エンリーコとアルトゥーロがまた叫んだ。

「この怒りを抑えることはできん」

「今ここで殺してくれる」

「そうだ、もう許せん！」

「出て行かなければ血で償ってもらおう！」

兵士達も怒りに満ちていた。そしてエドガルドと彼の兵士達もまた。

剣を抜き今にも戦わんとしていた。

「いいだろう、一人残らずだ」

「血祭にあげてやろうぞ！」

「我等が一人もいなくなろうともだ！」

「戦いの中で果てる！」

こう言って剣を手にして叫ぶ。まさに一触即発だった。

そしてエドガルドは言うのだった。

「邪な心の女に私の死は素晴らしい光景だろう。その亡骸を踏み躪り満面の笑顔で裁断に向かいそこで神の祝福を受けるべきなのだ」

「神よ、どうか」

ルチアも言うのだった。

「お救い下さい、この恐ろしい時に望みを御聞き下さい」

悲しみと苦しみに満ちた顔での言葉だった。天を仰いでいた。

「この世には何の望みもありません。どうかこの限りない悩みの祈りを御聞き下さい。どうか私のこの世で最後の願いをです・

「どうかここは

「御気を確かに」

ライモンドとアリーサはそのルチアを左右から支えて励ます。

「そしてエドガルド殿、貴方は」

「どうかお逃げになって下さい」

「逃げる必要なぞない！」

しかし彼はそれを聞こうとしない。

「今の私にはもう」

「ですがここはどうか」

「お下がりに下さい」

「生きよというのか、私に」

「そうです」

その通りだと彼に告げるライモンドだった。

「ですからここは」

「………くっ」

「エンリーコ様」

そして彼にはノルマンノが傍に来て言う。

「宴の場です。ここは」

「収めよというのだな」

「そうです、ですから」

「致し方あるまい」

彼もそれに頷いた。アルトゥーロもだ。

「それではだ」

「はい、それでは」

「全ては永遠の慈悲の前で和らげられます」

ライモンドの言葉だ。

「たった一つの悲しみに対して数限りない喜びが与えられることもまた人の世です」

こう言って双方を下がらせた。エドガルドは己の兵士達を引き連れ忌々しげに広間を去った。ルチアは遂に気を失いアリーサがそれを支える。宴の場は騒乱の坩堝となっていた。

第三幕その一

第三幕 昇天の翼

塔の中にある大広間には何の装飾もない。ただ一つ弱い光を放つ蠟燭がテーブルの上にありその叔母に古ぼけた肘掛け椅子がある。そして扉構えに。窓が一つだけある。エドガルドはその肘掛け椅子に座っている。

彼に従う兵士達も部屋の中にはいない。彼は窓の外を眺めていた。
「恐ろしい夜だ」

そしてこう呟いた。

「雷が鳴り天が荒れ狂う。私の運命を見ているようだ」

こんな言葉も出て来た。

「自然の秩序が覆り全てが破滅してしまえばいい」
出て来る言葉はこんなものだった。

「何もかもが」

こう言っているのだ。不意に気配を感じた。そうして椅子から立ち上がると部屋にエンリーコが入って来たのであった。

「エンリーコだと!？」

「そうだ、わしだ」

紛れもなく彼だった。蠟燭の弱い光の中に二人の青と赤のそれぞれが映し出されそのうえで強く睨み合いはじめていた。

「何という大胆不敵だ」

「わしが来て悪いというのか？」

「まさか私の前に今出て来るとはだ」

「貴様に不幸をもたらす為にだ」

来たというのである。

「その為に来た」

「私に不幸をというのだ」

「よくも宴の場を乱してくれたな」

そのことに激しい怒りを見せているのである。

「その借りを返させてもらいに来た」

「よくそんなことが言えるな」

そしてエドガルドもまた怒りに満ちた声で返すのだった。

「ここで何があつたかわかっているな」

「わしが貴様の父を殺した場所だな」

「そうだ」

ここでエドガルドの声がさらに強いものになった。

「その通りだ、私の父はここで貴様に殺された」

「貴様も殺すつもりだ」

「父の霊はここに留まっている」

少なくとも彼はそう感じているのだった。

「そして貴様を殺せ、復讐を遂げると言っているのだ」

「ではわしを斬るといふのだな」

「その通りだ。墓場に入るのは貴様だ」

「ふん、そう言つのだな」

「何度でも言おう」

怨敵を前にしてさらに言葉が動いていた。

「貴様は私は斬る。一族の仇としてだ」

「その貴様に面白いことを教えてやるう」

エンリーコの顔に残忍な笑みが浮かんだ。その笑みで彼に告げてきたのだ。

「一つな」

「それは何だというのだ？」

「ルチアだ」

彼女のことを話に出してきたのである。

「あの娘は今どうなっていると思う」

「知るものか」

あえて素っ気無く返すエドガルドだった。しかしエンリーコはその彼に対してさらに言つのだった。宿敵に対する残忍な喜びと共に

だ。

「今花嫁の床にいる」

「何だとっ!?!」

「それを伝えておこう」

「こつ言うのであった。」

「それだけだ」

「おのれ、それは」

「聞くのだ」

エンリーコは心を痛めるエドガルドにさらに告げてきた。

「わしの館は今幸福と贅美の中にある」

「そして貴様の一族もか」

「そうだ。しかしだ」

さらにエドガルドを見据えての言葉である。

「わしの心の中は違う」

「では何だというのだ」

「幸福も贅美もない」

その二つがないというのだ。他の一族の者と違い。

「あるのは復讐だけだ」

「それは私の言葉だ」

「わしの祖父は貴様の父に殺された」

「その私の父は貴様にだ」

「一族の多くの者が貴様の一族に殺されてきた」

憎しみの念を露わにさせる。それはどうしようもないまでに高ま

ってきていた。

第三幕その二

「数多くな」

「代々に渡つて。貴様の一族に私の一族の者は」

「その怒りがわしをここまで誘つたのだ」

「私を生かしてきた」

「貴様を斬る」

エンリーコは言い切った。

「このわしがだ」

「いいあるう、私もだ」

エドガルドも憎しみに満ちた目で彼に返す。

「貴様の心臓を貫いてやろう」

「そうするといふのだな？」

「そうだ」

まさしくその通りだといふのだった。

「父上の墓前で貴様の心臓を貫いてやろう」

「いいだろう、それではだ」

「何時だ」

エドガルドは今度はそれを問うた。

「それは何時なのだ」

「夜が明けはじめ」

エンリーコは問いに応え時間を述べはじめた。

「最初の光がさす頃だ」

「場所は何処だ」

「レーブズウッド家の冷たい墓前だ」

「私のその家の墓前でか」

「そこならば文句はあるまい」

「望むところだ」

そしてエドガルドはすぐに返した。

「そこで貴様を斬り父上にそれを見せよう」

「死ぬ覚悟をしておけ」

「それは貴様だ」

また言い返すエドガルドだった。

「この私の手でな」

「太陽よ」

エンリーコは上を見上げて宣言した。

「早く昇るのだ」

「そうだ、昇れ！」

エドガルドも言った。

「朝になるのだ。一刻も早く！」

「そして貴様の最期を見届けてやる」

「不吉な花環の様に」

「貴様を倒し」

さらに言葉を続けていく。

「死を賭けた憎悪の盲目的な怒りを」

「恐ろしい闘いを夜明けの光を」

「照らすのだ！」

そしてエドガルドはまたエンリーコに告げた。

「そこで貴様の心臓をだ」

「刃は貴様の上にある」

エンリーコもだった。

「レーブンウッド家の墓地で」

「夜明けにだ」

こう言い合いまた睨み合い。自然と言葉が出て来た。

「地獄の悪霊達は復讐を叫び」

「我等の魂を残酷に支配する」

「我々の心に燃える怒りは響き渡る雷よりも」

「咆哮する暴風よりも激しく恐ろしいものだ」

二人は互いに部屋を出た。風が部屋の中に入り蝋燭の火を消して

しまった。後には不気味な沈黙があるだけだった。他には何もなかった。

大広間はエドガルド達が去った後喜びの場に戻っていた。そしてそこで誰もが華やかに笑いダンスに興じていた。美しい音楽も聴こえてくる。

その場で誰もが。賑やかに歌っていた。

「さあ祝おう」

「この婚礼を」

「今幸せは戻ったのです」

こつ口々に言っている。

第三幕その三

「限りない喜びの声がスコットランドに満ち」

「それは海辺から海辺へと」

「深い森の中にまで」

「何処までも満ち」

自然と歌声になっていた。そうしてだった。

「敵は去った」

「あの男達は」

エドガルドのことも思い出したがそれは幸福を際立たせる香辛料に過ぎなくなっていた。

「もう去りました」

「残っているのは」

「深い恵みの風」

「それだけです」

こう歌っているところであった。ライモンドが息を切らして部屋の中に入って来た。その足取りはよろめいていてそれだけで何か不吉なものを感じさせていた。

「大変です！」

「司祭様ではないですか」

「どうされたのですか？」

「顔が真っ青ですよ」

誰もがその彼に声をかける。

「一体全体」

「何かあったのですか？」

「恐ろしいことが起きました」

「こつ皆に告げるのである。」

「とてつもないことが」

「恐ろしいこと？」

「といたしますと」

自然にダンスも音楽も中断されていた。皆そのうえで彼に対して問うのであった。

「それは一体」

「何でしょうか」

「ルチア様がです」

「花嫁殿がですか」

「どうされたのですか？」

「お部屋から聞こえてきました」

ライモンドはその蒼白の顔で言っていく。

「御二人が入られたそのお部屋の中からです」

「そこから？」

「一体何が」

「死に瀕した人の声がです」

まさにそれだというのだった。

「それが聞こえてきました」

「死の声か!？」

「まさか」

「いえ、そのまさかです」

こう驚く一同に話すのだった。

「私とその部屋に駆け込みますと」

「どうなつたのですか!？」

「一体何があつたのですか？」

「恐ろしい不幸がそこにありました」

そしてさらに言うのであった。

「アルトゥーロ様がです」

「あの方が」

「まさか!？」

「そのまさかです。床の上に横たわっておられました」

「何ということ……」

「それでは死の声は」

「言葉もなく冷たくなって」

ライモンドはその不吉な言葉を続けていく。

「血に塗れておられました」

「ではルチア様は!？」

「どうされたのでしょうか」

「ルチア様が」

ライモンドの言葉がさらに震えていく。その中での言葉であった。

「そこにおられました」

「では御無事か」

「それは何より」

「いえ」

しかし無事という言葉はライモンドによってすぐに打ち消された。

「そうではありません」

「といたしますと」

「どうなったのですか?」

「殺されたアルトゥーロ様の剣を握り締められました」

「何と!」

「それでは!」

「はい、そうです」

ライモンドはその震える声で一同に話していく。

第三幕その四

「虚ろな顔でこう仰いました」

「どうなのですか？」

「何と仰ったのですか？」

「私の夫は何処にいますか？」

この上なく不気味な声になっての言葉である。

「そして蒼ざめた顔で」

「そのお顔で」

「微笑まれました。最早あの方は」

「何ということ……」

「恐ろしいことだ……」

誰もがここまで聞いて啞然となってしまうた。

「不幸が起こってしまった」

「何よりも恐ろしい不幸が」

そして呆然として呟くしかなかった。そしてそこに。

「ル、ルチア様！」

「アリーサか？」

「は、はい。大変です！」

ライモンドの声に伝えてきた。声は広間に向かう廊下からだ。

「ルチア様がこちらに！」

「何だと！」

広間に彼女が現われた。簡素な純白の服のあちこちに鮮血が付き
紅く染まっている。そうして乱れた髪はそのまま顔はこれまで以上
に蒼白となっており血の気は失せて亡霊の如き様相になっている。
目は虚ろでそれと同じだけ臃な微笑みを浮かべている。

「何ということだ……」

「あれではもう……」

「あの方のお声が聞こえて」

ルチアは広間の中央に来て呟きはじめた。

「私の心に届いて滲み込んで」

「それはまさか」

「あの家の」

「エドガルド様」

そしてその男の名前も口にした。

「私は貴方のところに戻りました」

「そこまであの男のことを」

「そうだったのか」

皆あらためてそのことを知ったのだった。

「しかしそれで」

「この方はもう」

「冷たいものが私の胸を這い回り身体中が震え」

「もう駄目だ」

ライモンドはその彼女の顔を見て言った。

「死相だ」

「死相、それでは」

「そうだ」

横に来たアリーサにも話した。

「ルチア様はもう」

「そんな……」

「心も何もかもが失われてしまった」

それが今の彼女なのだ。

「これでは」

「泉の傍に行き」

ルチアはここで急に怯えた顔になった。そうしてさらに呟くのだ
つた。

「亡霊が来ました。早く逃げましょう。そしてあの祭壇の場で」

「最早何もかもが終わった」

「絶望だけがある」

「薔薇の花が咲いています。そして天界から歌が聴こえ」
「今度はその虚ろな顔で上を向いていた。」
「讃歌が私達の為に。全ては私達の為に」
「あの方にはもうそうしたものしか見えていないのだ」
「またライモンドが呟いた。」
「最早な」
「この世のものは」
「見えはしなくなつた」
「またアリーサに述べた。」
「何一つとしてな」
「………それでは間も無く」
「この世を去られる」
「その死相のルチアを見ての言葉だ。」
「それはもう誰も止められはしない」
「私は幸福です。心に感じられても言葉には表せない喜び」
「ルチアの言葉は続く。」

第三幕その五

「香かくゆり神聖なる光が見えて司祭様がおられて」

「そうしていれば」

ライモンドの心に後悔が起こった。

「この様なことには」

「右手を差し伸べて儀式を行い私は貴方のものになり貴方は私のものになり」

それが今彼女が見ているものだった。

「こうしてあらゆる喜びを分け合い障害を情深い天の微笑みとするのですね」

「ライモンド様」

兵士の一人が彼のところに来て告げてきた。

「エンリーコ様が来られました」

「そうか」

「話は聞いた」

エンリーコが慌しく部屋に入って来た。丁度今エドガルドのところから戻って来たばかりだ。戻って来てすぐに話を聞いたのである。

「まことか？」

「残念ですが」

沈痛極まらない顔で答えるライモンドだった。

「それは」

「あれがルチアか」

ここで彼は妹を見た。その完全に失われた彼女をだ。

「まさか。あれが」

「そうです」

「最早何もかもが失われてしまいました」

周りの者が沈みきった顔で彼に告げた。

「これでもう」

「全てが」

「私は」

ここで急に怯えだすルチアだった。

「私はお兄様に従いました」

「わしにだと？」

「ですからその様な恐ろしい顔で見ないで下さい」

また別の幻想を見ているのだった。

「契約書には署名しました。ですから」

「あのことが」

エンリーコにはすぐにわかった。

「あのことがそれ程までに」

「あの方が来られ」

先程の宴の場を見ているのだった。

「私の指輪を踏み躪り私を呪い」

「それ程までに」

「この方にとつては傷になったのか」

「ですが私は」

その怯える声で彼を見ながらの言葉であつた。

「貴方を愛しています。エドガルド様、貴方だけを」

「神よ、御加護を」

「この死にゆく娘に」

誰もが祈るしかなかった。最早。

そしてまた。ルチアは言うのであつた。

「私には貴方だけです。ですから逃げないで下さい」

「恐ろしい夜だ」

「こうなってしまうとは」

「エドガルド様、どうか一緒に。私は天界で貴方の為に祈ります」

その言葉が続けられる。

「貴方がおられる時に。私はただ祈ります」

ここまで言つて崩れ落ちていく。アリーサが駆け寄り抱き締める。

しかしその身体はもう。

「何と冷たい……」

「冷たいというのか」

「そうです」

まさにその通りだとエンリークに返す。

「そして鉛の様に硬く重いです」

「そうなのか……」

「最早。間も無く本当に」

「わしは全てを壊してしまった」

エンリークも最早こう言うしかなかった。

「何もかもを」

「まさかこうなってしまうとは」

「この方はあまりにも繊細だった」

ライモンドがノルマンノに対して述べた。

「私もそなたもだ」

「はい……」

「誰にも罪がある」

そのルチアのことについてである。

第三幕その六

「誰もがルチア様を追い詰めてしまった」

「そうなつてしまいました。これは」

「恐ろしい後悔、深い絶望」

それを感じるしかなかった。

「最早この世での光は失われた」

「最早残っているのは」

「絶望だけだ」

彼等はその中に沈んでいった。その中にだ。

墓地。朝が近付く薄暗い世界の中で無数の墓標が並んでいる。その中に一人エドガルドが立っていた。彼は自分の前の墓標を見て呟いていた。

「私の祖先達の墓よ」

その墓を見ての言葉である。

「不幸な血筋に最後に残った私を受け入れて下さい。私の怒りの短い火も消えました」

残ったものは。絶望だけなのだった。

「私は仇敵の刃に倒れます。この生涯は恐ろしい重荷でした」

彼にとつてはまさにそうだったのだ。

「ルチアのいない世界は何もありません。ですがあの城は宴を照らし短い夜を過ごしている、私が絶望の中に沈んでいる時に貴女は笑い幸福の中にいる」

こう言うのである。

「貴女は幸福に、私は死の胸に抱かれているのだ」

顔をあげる。見えるのは黒から青に変わろうとする世界だ。遠くには白くなつてきている空が見える。星もまだ僅かに残っていた。

「間も無く忘れられた我が一族の墓が私の永遠の家になる。憐れみ深い涙がそこには注がれない。私には死者に払われるべき慰めさえ

ないのだ」

彼の一族の運命も重なり。そう言わせていた。

「誰もが忘れてくれ。誰も私の墓の前を通ってくれるな、最早私には」

「こう言って絶望の中に浸っていた。するとここでルチアの城の方から悲しい声が聞こえてきた。

「不幸な乙女よ」

「身のすくむ恐ろしい運命」

「最早何の望みもない」

「あの声は」

エドガルドもその声を聞いた。そしてそちらに顔を向ける。

「何なのだ？」

「全てが終わろうとしている」

「あの乙女の」

「一体何だというのだ？」

悲しみにくれた一団がエドガルドの前に来た。彼はその彼等に対して問うた。

「お話頂きたい、何があったのか」

「泣いているのです」

「あの方の為に」

見ればその通りであった。彼等は確かに泣いている。そして言っているのだった。

「今はです」

「死にゆくあの方の為に」

「死だと。死ぬのは私だが」

「いえ、ルチア様です」

しかしだった。ここでエドガルドは思わぬ声を聞いた。

そして唾然となつて。さらに問うのだった。

「ルチア！？何故だ」

「悲しみの中に全てを失われて」

「そうして心も消えて」

「馬鹿な……ルチアが」

「間も無くです」

「あの方が」

こう言つて泣くしかない彼等だった。エドガルドもそれを見て呟いた。

「こんなことになるとは」

そしてだった。城の方から鐘の音が聞こえてきた。清らかだが寂しく悲しい、そんな鐘の音が城の方から聞こえてきたのである。

「あの鐘の音は」

「ルチア様が」

「もう」

「そうか。ルチアは旅立ったか」

エドガルドは全てを悟った。そして。

「最早私の運命は決まった」

「!?! 一体」

「どうされるのですか?」

「どちらにしろこうなる運命だった」

腰の剣を抜きながらの言葉である。

「ならばだ」

「ならば!?!」

「しかしそれは」

「この世に望みはない」

言いながらその剣を胸にやる。だがここでライモンドが来て彼を止めるのだった。

「お待ち下さい」

「ライモンド殿が」

「そうです」

その彼が来て止めるのだった。

「貴方まで死なれることはありません」

「だがルチアはもう」

「しかし貴方は生きておられます」

「私の全てはルチアと共にあった」

言葉は既に過去のものだった。そしてその目も。

この世を見てはいなかった。既に。彼は旅立とうとしていたのだ。

そして今。言うのだった。

「神の下に向かう貴女に言おう」

「ルチア様に」

「そうだ。心を穏やかにして私の方に向けて欲しい」

剣を放しはしない。決してだった。

「貴女に誠を誓った男が貴女と共に天に昇れるように」

「それだけはどうか」

「例え人間達の怒りが私達の間にもこの様な残酷な運命を与えても」

ライモンドの制止は最早彼には何の意味もなかった。

今まさに剣を胸にやり。また言うのだった。

「私達二人がこの世で隔てられたとしても」

「しかし貴方まで」

「天上で神が結びつけて下さる様に。私は今」

こう言って自らの胸を刺した。彼もまた全てを終えたのだった。

「貴女の場所へ行こう」

「何故こんなことを」

「私にはこの世はあまりにも悲しかった」

エドガルドは死に瀕した顔で呟いた。ライモンドがその彼を支え

る。しかしそれは最早何の意味もなかった。彼の死は間も無くだっ

たからだ。

「しかし神の傍では」

「ルチア様と共にですね」

「そう、共にいられる」

こう言って今崩れ落ちた。そして最後の言葉は。

「そして永遠に貴女に誠を誓おう」

「全ては終わった」

ライモンドは事切れたエドガルドを抱きながら呟いた。

「神よ、全てを許し給え」

鐘の音がまた鳴り響いてきた。それは静かな鎮魂の鐘の音だった。朝になるうとしていゝる墓地にまで鳴り響き。悲しい運命を辿った者達の魂を慰めていた。

ランメルモールのルチア

完

2010・1・6

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9512n/>

ランメルモールのルチア

2011年4月28日00時58分発行